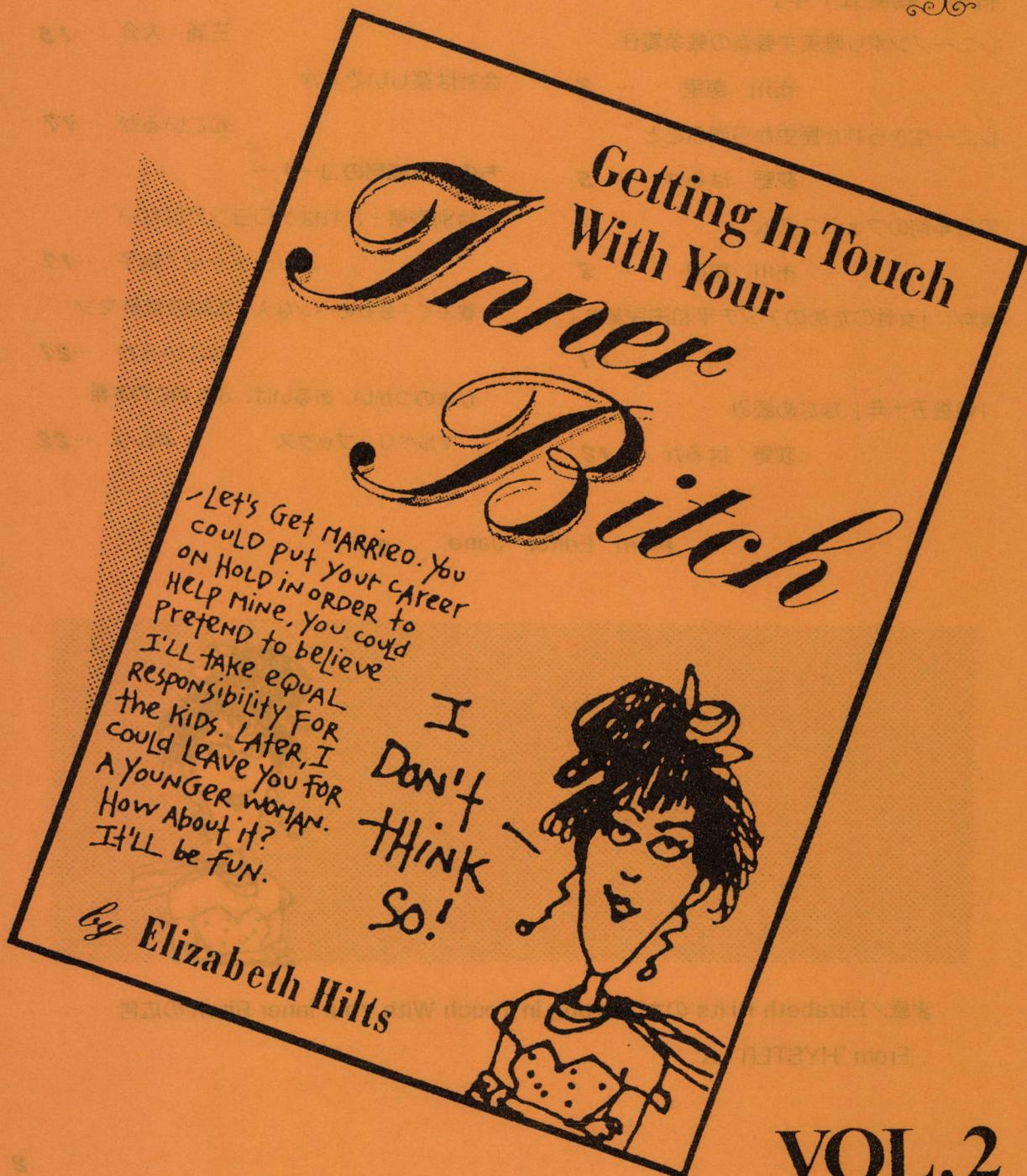


# CRAZY JANE



Getting In Touch  
With Your

## Inner Pitch

Let's Get MARRIED. You  
could put your career  
ON HOLD in order to  
HELP mine, you could  
Pretend to believe  
I'll take equal  
responsibility for  
the kids. Later, I  
could leave you for  
A YOUNGER woman.  
How about it?  
It'll be FUN.

I  
Don't  
THINK  
So!



By Elizabeth Hilts

VOL. 2

# ! CONTENTS !

## 特集「戦後五十年」

レニーノンポリ唯美主義者の戦争責任  
市川 恵里 … 3

レニー生きられた歴史から学ぶこと  
荻野 はるか … 5

五〇年前のフェミニズム  
市川 恵里 … 8

資料：「女性のためのアジア平和国民基金」  
… 11

「戦後五十年」ななめ読み  
荻野 はるか … 12

【パンサー】のサウンド・トラックを聞く

三浦 大介 … 15

会社は楽しいですか  
ねこいるか … 17

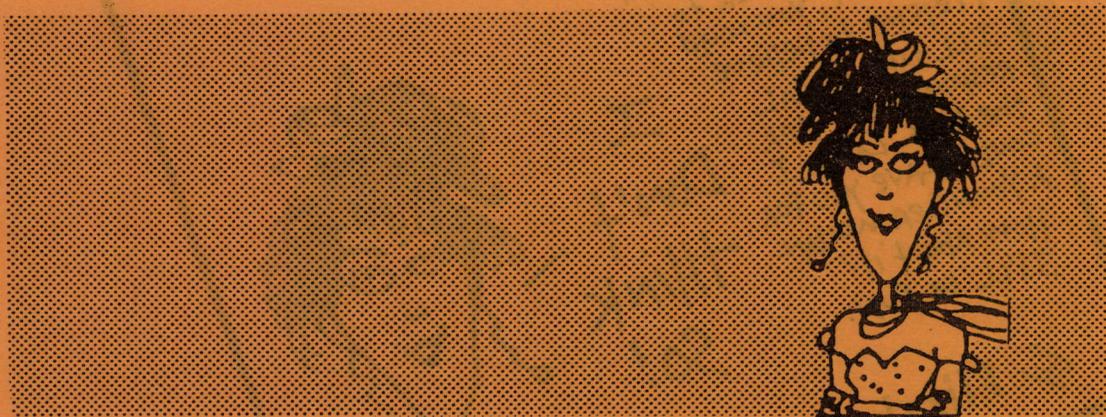
ちのみち通信のコーナー

特別寄稿・これはケロヨンではない  
ミッシェールノ風子 … 19

教えて！会社のヘンな人 伝説の営業マン  
ねこいるか … 21

がまのつかい、あるいは、ぶたねこの本棚  
マルベリィ・ブックス れんり … 22

… From Editor Jane 24



表紙/Elizabeth Hi Itsの本“Getting In Touch With Your Inner Bitch”の広告

From “HYSTERIA”

# レニ

## ノンポリ唯美主義者の 戦争責任

市川恵里

「不屈の意志」という言葉は、レニ・リーフェンシュタールのような女性のために存在するのではないだろうか。レイ・ミュラー監督のドキュメンタリー映画「レニ」が映しだすレニの数奇な生涯、数々の映像作品、そして今なおパワフルな頑固ばあさんでありつづけるレニの姿は、すこぶる興趣に富み、時にチャームングでさえある。だが同時に、芸術家の（もつと広いえばメディアに携わる者の）戦争責任、政治的責任というものを考えさせずにはおかない。

政治には興味がない、というレニの言葉は真実だろう。戦後の審査の結果、彼女はナチの「同調者」との判定を受けるが、「ナチ政権支持や、刑に当たる政治活動は認められない」とされた。彼女が求めるのは昔も今もただひたすら「美」のみであつて、美しくありさえすれば、

対象はなんでもよかつたように見える。「意志の勝利」のメッセージは雇用創出と平和だけでした、とレニは臆面もなく言つてのける。今となつては大方の失笑を買うほかないようなこうした戯言を彼女は無邪気にも本気で信じているのだろうか。それともそれは、老獪な自己弁護の戦略にすぎないのか。

私はここに、レニの政治的意識の欠如、あるいは幼稚さ（それゆえ彼女の政治意識は当時のドイツ人の一般的水準にあつたと言われるわけだが）をありありと見る思いがする。ノンポリであつたからこそレニはまさしく「意志の勝利」をあのように撮りえたのだ。しかつめらしい政治的意図や配慮を完全に欠いていたからこそ、ただ美的価値のみを指針として、この上なく莊嚴に、神話的に、美しく「ナチ党大会」を描きだした。情動を直撃する映像と音楽の魔術。沸き起ころる熱狂的な興奮の渦があらゆる思考を呑みこんでいく。こうしてレニの政治意識なき芸術至上主義とドイツ・ファシズムの結託が、あの最強の芸術プロパガンダ映画を誕生せしめたのであつた。ちやちな政治的宣伝などより、芸術の力による永遠化こそヒトラーの望むところであつたらう。レニはみごとその期待にこたえ

てみせた。

レニはあくまで政治と芸術を切り離そうとする。「加えて言いたいのは、全身で創作に没頭している芸術家は、物事を政治的には考えられません。偉大な芸術家は皆そうでした。ミケランジェロ、ロタン、印象派の人々。彼らは政治意識もなかつたし、時間もなかつたと思います。世の動きも先のこともわからなかつたでしょう」。だがそれは嘘だ。政治や経済とはまったく無関係な、超越的な芸術家、純粹な「芸術」なるものが存在するといふ神話は、すでに破綻しているといえよう。いかなる「芸術」も言説も、それが生まれた社会の価値観・イデオロギー、時代の刻印を決定的に帯びており、そこから逃れることはできない。それは、さまざま（政治的、社会的、性的etc.）力関係の場という意味での政治学と無縁ではありえないのだ。すなわち、いかなる作品といえども、特定の時代、特定の社会の中で生きる人間によって生みだされ、その社会の中で流通するものである以上は、なんらかの社会的意味を担わざるをえないのである。社会的コンテクストを離れた芸術作品の自律的・絶対的価値があるわけではない。作品の価値や解

積は、時代の流れの中で、送り手と受け手との社会的な関係の中で変化していくものだ。もちろん古典といわれるような時代が変わってもその価値を失わない作品も存在するが、それすらも、それぞれの時代にとって、つねに同じ意味、同じ価値をもっていたわけではあるまい。

しかしこうした「聖別された芸術」幻想を信奉する人間はあとをたたない。この日本でも同じことだ。一方、社会的・政治的意味を絶対視する傾向も存在する。社会的意味を無視した芸術至上主義的な態度が芸術の悪しき「神秘化」に手を貸し、自分にとって都合の悪い政治的解釈を拒絶するのに対し、社会的意味のみを絶対視した価値判断もまた、一面的であるとの誇りを免れないだろう。作品とは（少なくとも作品の名に値するあるレヴェル以上の創作物に関しては）多元的な意味構造をもった有機的統一体であつて、あるひとつの視点からの解釈ですべてが解き明かされるはずもないからだ。

「レニ」に戻ろう。問題は、芸術の聖域に閉じこもった人間に見られる倫理的判断の停止であり、映像・芸術の社会的意味に対する無自覚である。「美」に淫したレニに権力の意図を見抜く力はなか

った。ナチが「平和」をもたらずだろうと信じたレニ（当時そう信じたのは彼女ひとりではなかった）。その意図が問題であつたわけではない。「意志の勝利」を（ひいてはより間接的な形で）あれ「オリンピア」を撮ること、レニは結果的にナチの広告塔として機能したのである。その結果に対する責任は消えることがない。たしかにレニは戦後ずっと過酷な社会的制裁を受けつづけてきたし、苦しみぬいてもきただろう。だが彼女の中で芸術と政治の乖離が解消されぬかぎり、レニは最後まで社会的意味と責任を痛感することなく終わるのではないだろうか？

映画の最後でレニは訴える。「一体どう考えたらいいのです？ どこに私の罪が？ 『意志の勝利』を作ったのが残念です。あの時代に生きたことも。残念です。でもどうにもならない。決して反ユダヤ的だったことはないし、だから入党もしなかつた。言つて下さい、どこに私の罪が？ 私は原爆も落とさず、誰をも排斥しなかつた……。ナチ婦人部長としてドイツ女性の頂点に立ち、ナチス化の旗をふつたあのゲルトルト・シヨルツクリンクさえナチ戦犯として訴追されなかつたことを思うと、レニの上に

のしかかりつづける罰は重すぎると感じられる。レニが携わつたのは政治活動ではなく映画というメディア活動であつた。しかしメディアには、生半可な旧式の政治活動を凌ぐ影響力がそなわつていふことを、ナチはすでに知つていたのである（ヒトラーIIゲッベルスによる積極的な映画政策を見よ）。レニは、卓越した才能と技術に基づくあの類まれな映像の力ゆえに、ひとりの女性であることを超え、ドイツ（国民）の黒い過去の象徴となつてしまつたのではないか。戦後ドイツの罪責感を一身に投影され、強固なタブーと化したのではないか。

ファシズムとは美でありうることを、美とは危険なまでに政治的なものであることを、ほかならぬノンポリ唯美主義者レニの手になる「意志の勝利」こそが雄弁に語つてやまないとは、大いなる皮肉と呼ぶべきだろうか。

\*なお、本文中に引用したレニの言葉は、映画「レニ」プログラム（バンドラ発行）中の採録シナリオによつていふ。



# 「レニー」——生きられた歴史から学ぶこと

「一体どう考えたらいいのです？どこに私の罪が？…決して反ユダヤ的であったことではないし、だから入党もしなかった。言ってください、どこに私の罪が？…」

観終わって、絶句した。現在もなお、カメラを抱え、アーティストとして活躍するこの女性が持つエネルギーに圧倒されたというだけではない。確かに彼女はすごい。およそ一世紀、ダンサー、女優、映画監督、そして写真家と、自分の活躍の場を変えながら、どこでも第一線の仕事が続けてきた。とても九〇才とは思えない若さ。そしてあのパワー。人間、つくづく実年齢ではなく、個体差なのだと思ひ知らされる。しかし、私が絶句した一番の理由は、彼女の最後の問いかけに一瞬答えを失ったからだ。

「いや、あなたには罪がある。あなたの

荻野はるか

撮った『意志の勝利』といった映画は、あなたが何と弁解しようとも、ナチスのこれ以上はない宣伝映画だったことは事実だ。誰もが『ナチスがあんな行爲を行っていたなんて知らなかった』と言う。そうしたナチスのイメージづくりに他ならぬあなたもまた荷担したのだ。」

確かにそうだ。彼女が結果的にナチス政権をイメージの上で支えたことは疑いようもない。しかも、映画を撮影するための莫大な資金や人材は、ナチスの庇護なしにはあり得なかったのだ。いくら彼女が「ナチスが行った行爲を」知らなかった、気がつかなかったと主張したところで、結果的に見れば、「ナチスの走狗」としての役回りを見事にやり遂げたということに変わりない。そんな彼女の一連の仕事が「有罪」と

されるのは、むしろ当然ともいえる。

しかし、私はここまで来て躊躇してしまふ。というより、何ともいえず複雑な気持ちになる。それは、もし、この才氣溢れる女性の活躍の場が日本だったとすれば（当時女性にそんな活躍の場があったとすれば、の話だが）、彼女は戦後「タブー」としてあれほどまでに無視され危険視されることなく、相変わらずの栄光と名声を保持することができたのではないだろうか、という思いに駆られたからだ。

8月号の「RONZA」は、「文筆者」出版・新聞の戦争責任」という特集の巻頭で、櫻本雷雄という詩人の「住井すゑにみる『反戦』の虚構」という一文を掲載し、特集のいわば「たたき台」としている。筆者は、自分の「少国民」としての思想形成に圧倒的な影響力を与えた作家たちの言動を検証している人だ。彼が取り上げるのは、『橋のない川』の著者・住井すゑが書いた戦時中の文章だ。「戦争はありがたい。あり余る物によって却って心を貧しくされがちな人間の弱点を追い払って、真に豊かなものを与えようとしてくれている。」とい

った当時の文章を引用しながら、「戦中・戦後と『非転向』で反戦・反差別運動に関わる反骨の人」という彼女に定着した評価が虚構に過ぎないものであることを明らかにしようとする。

しかし、ここで問題にされているのは、住井が戦時中に一連の翼賛小説を書いた事実そのものではなく、多くの文化人・文筆家がそうであったように、彼女もまたそれを「なかつたこと」として、「反戦・反差別」という看板を掲げていることにある。

つまり、櫻井としてみれば、住井から文筆家として自らの「責任」を認める言質を取りたかつたのだ。しかし、インタビューを受けた住井は、そうした文章を書いたことも記憶にない、と言い、櫻井から（自分の書いた）現物をみせられると、生活のため仕方がなかつた。戦時中の書いた小説は、「商品」であって、それ以上でもそれ以下でもない。自分だけが誇られる謂れはない。と言いつ切る。

この現役作家の言い分は、かなりの部分でレニの言い分そっくりだ。つまり、戦中の自分の表現に対して政治的な責任をとる

必要を感じていないという点において。

（偶然だが、二人は同じ一九〇二年生まれだ！）自分を「職人」と言い、自分の作品を「求められるまま」書いた（作った）に過ぎないのだと言う。違うのは、戦後の二人に対する評価だ。レニはその卓抜した仕事ぶりによって逆にその影響力を指摘され、拘禁生活を送り、表現の場を長い間失う。彼女の名は、ドイツでいまだに「タブー」だ。住井は「翼賛作家」としての戦前の言動は忘れられ「正義の人」たり得てきた。これは何という皮肉だろうか。



© Leni Riefenstahl-Production

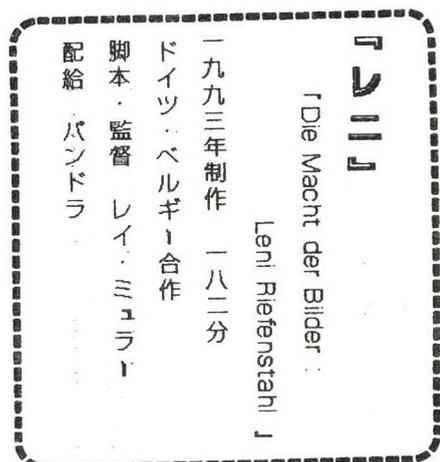
そうなのだ。私がああ映画を見て絶句せざるを得なかつたのは、レニが置かれている状況と日本のそれとの大きなギャップに對してだ。住井だけが特別でもなんでもなく、日本では正に彼女が主張するように「みんなそうだった」という事実。「近代文学」の同人、或いは吉本隆明といった人々の間で「（表現者の）戦争責任」という問題は戦後確かに問題として提起されたが、決して思潮の主流とはならなかつた。残念ながら現在もそうだろう。

時間の経過のなかで、どの分野でも、戦時中の言動についてのあれこれは、「みんなイカれてたんだ」ということで免責される。しかし一方でその作家の輝かしい業績の中の「恥部」とされ、しまいには、「なかつたこと」にされる。当時、明確な政治的意図を持って作られた作品は、その政治的な文脈を切り捨てた上で評価され解釈づけられていく。

改めてレニの主張が思い出される。「私は撮りたいものを撮っていただけ。純粋に「美」にしか興味はない」と。この言葉は今でもこの国で何と親和的に響くことが。

現に又バ族を撮った彼女の写真展が九一年に東京で開催されたとき、聞こえてきたのは、レニを「偉大な芸術家」として、「ナチの協力者」という汚名から救い出そうとする声だった。

身の潔白を主張する言葉ではなく、ましてや「みんなそうだった」という開き直りではなく、それぞれの立場においての責任を引き受ける意志と思考をもつこと。「レニ」という生きられた歴史を目の当たりにして、それはあの戦争の当事者だけに課されたことではないとつくづく思うのだ。



#### ◆ 「SHOAH (ショアー)」 続報 ◆

前号で書いた映画「SHOAH (ショアー)」は、各地での自主上映・本の出版を皮切りに、「現代思想」での特集(95年8月号)、「週刊読書人」の特集、NHKでの対談など、ここにきてがぜん注目を浴びています。(これも「戦後50年効果」なのでしょう。たぶん。)

この号がお手元に届く頃には、8月13日～16日、4夜連続での「ショアー」の上映(NHK 衛生第一放送)も済み、ご覧になった方も増えているのではないかと思います。ご覧になった方、どのような感想を持たれましたか?

まだご覧になっていない方! これからもチャンスはあります。9月からの全国上映は次の通りです。時間と上映場所の折り合いがつけば、是非ご覧ください。9時間半の上映時間は、肉体的にきついものがありますが、ご覧になって絶対ソンはないはずです。

**映画「SHOAH」上映日程**(95年7月7日付け「週刊読書人」を参考にしました。)

9月2日 12:30～ 鎌倉市中央公民館(0467-25-3305 鎌倉・映画を観る会)、9月6～7日 山形市:ヌーベルF(山形国際ドキュメンタリー映画祭実行委員会 0236-24-8862)、9月10日 富山県民会館(0764-34-4600 桂書房)、9月15日 神戸:シーガル・ホール(078-222-2397)、9月23日 杉並区勤労福祉会館(03-3396-3203 東京女子大教職員組合 受付・問い合わせファックスのみ)、9月30日 三鷹市公会堂(0422-33-3187 国際基督教大学平和研究所)、10月28日 新潟市民映画館シネ・ウインド(025-243-5530 県立新潟女子短期大学)

※詳しい上映時間等は直接お問い合わせを!

# 50年前のフェミニズム

市川恵里

去年ごろから、かまびすしく「戦後五〇年」が言われるようになり、多種多様な関連企画・催しが相次いでいる。国会には「記憶の暗殺者たち」がはびこり、「慰安婦」をはじめなされるべき謝罪と補償を拒みつつけているこの国にとって、「戦後五〇年」が、苦節五〇年の繁栄を確認する自己満足的イベントとして以上のなほどの意味をもちうるのかはすこぶる疑問である。これまで被害者意識一辺倒だった日本人の戦争認識の中で、ここ数年来加害性の自覚を語る人も少しずつ増えてきていると思われるが、それはけっして大多数の日本人の共通認識となりえているわけではない。加害性を口にする者にとっても、はたしてその認識はどれほど深く、切実なものとして存在するのだろうか。

フェミニズムに多少なりとも引っかけかかっているせいか、私には、当時の「婦人運動家」たちが戦争協力へ、翼賛へとなだれこんでいったその軌跡が気になってしかたがない。一九一〇年代から二〇年代にかけて澎湃として起こった各種婦人解放運動、婦選運動は、一九三一年の「満州事変」後強まりゆく軍国主義体制の中で徐々に息の根を止められていった。一九三七年盧溝橋事件を機に全面的な日中戦争に突入、国民精神総

動員運動が開始され、一九四〇年には婦選獲得同盟解散直後、大政翼賛会の発足を見る。さらに一九四二年には、愛国婦人会、大日本国防婦人会、大日本連合婦人会を統合して大日本婦人会が結成され、国家権力のもとに女性団体の一元化が遂げられた……。

鈴木裕子氏は、「女性史を拓く」1・2（未来社）『フェミニズムと戦争』（マルジュ社）『フェミニズムと朝鮮』（明石書店）等で、当時の女性運動家または女性指導者たち（平塚らいてう、市川房枝、山高しげり、奥むめお、高良とみ、羽仁説子、吉岡弥生、日本基督教婦人矯風会幹部の女性たち）がそれぞれに侵略戦争に荷担していったさまを跡づけていて興味深い。

残念ながらこの問題に関する証言はあまりに少なく、研究は乏しい。数少ない「抵抗」の記録を知ることすらもろん不可欠だが、同時に女性たちが戦争に（すすんであれいやいやであれ）思想・実践の両面において協力していった経緯もまた、継承されるべき重要な「記憶」であると私は思う。同時代を生きた人々が彼女らの「戦争責任」を指摘するのは困難であつたらう。なんらかの形で手を汚していない者などほとんど存在しえなかつた以上——。レイ・ミュラー監督の映画「レニ」の中で、ナチスとの関わりにおいて芸術家の責任について問われたレニ・リーフエンシュタールは、問いを発したミュラーに向かって（そして観客であるわれわれに向かって）逆に問いかえしている。「あなたならどうしますか？」——たしかに、あの圧倒的なファシズムの時代にも自分が生きていたら、いったい何をなしただろうか、どう生きえただろうか、と想像してみることなく、彼女らを一方的に断罪するような真似はしたくない。だが、「ああいう時代だからしかたなかった」ですましてしまうことも許されない。そのような安易な免罪は、再び同じ過ちに陥るの

を防ぐ手だてとはけつしてなりえないからだ。

人一倍不正を憎み、女性解放の志に燃えた女性たちが、なぜ天皇制ファシズムに呑みこまれ、侵略戦争のお先棒をかつぐにいたつたのか。多くの人が指摘するように、ここに日本の「母性主義」の暗い影を見てとるのはたやすい。その典型が平塚らいてうにおける母性主義・優生思想・自然宗教・天皇制崇拜の結託であろう。しかしむしろ私が興味を惹かれたのは、「実務家」として透徹したりアリストの眼をもっていたはずの市川房枝までもが、悩みつつも結局は翼賛へと迎合していったというその事実であつた（市川は戦時中大日本言論報国会の理事を務めたことが原因で一九四七年から三年半にわたって公職追放となつた）。近代的な女権主義と翼賛がどうやって結びついたのでか？

この点に関し、鈴木氏は、市川が時局への参加を選んだその動機の一端をなしていたのは女権主義であつたという指摘をおこなっている（『女性史を拓く』2、四九〜五一ページ）。「女権」参加「解放」（同書五一ページ）と信じ、どんな場合においても女性の社会参加すなわち女性解放とみなす見方の中では、何に参加していくのかという中身が問われることはない。市川房枝は翼賛体制に参加することで、女性の権利拡大・地位向上を目指そうとしたのだ。体制の中に入って、入ることで中から状況改善をはかる市川の戦術は、今も昔も両刃の剣である。そこには取りこまれて骨抜きにされる危険がつけまどつてゐる。

ひたすら婦選「女権」のみ目を向けた市川に、植民地民族の、侵略された側の（とりわけその底辺にあつた朝鮮人他「慰安婦」「性奴隷」たちの）筆舌に尽くしがたい辛酸と怒りは見えなかつたのだらう。日本人としての傲り（ナショナリズム）、婦人運動指導者としての傲りが陥穽となつた。女性全体のために、「お国のために」、よかれと思うその「善

意」こそが翼賛への一歩であつた。国家はそうした個人の善意や誠実さをまんまと利用して女たちを銃後の「兵士」へとつくりかえていく。「善意」とは危ないものである。無自覚な「参加」「善」という機械的平等主義もまた。（ただし昨今の女子学生就職差別問題に見られるように、最低限の機会の平等さえ保証されていない状況では、まず具体的な差別撤廃と平等獲得のための有効な闘いがなされるべきであると私は考えている）。

ある公的な組織・制度などに入るチャンスが平等に与えられればそれでよしとしてしまい、地位が上がつたという錯覚に安住し、その組織・制度そのものに内在する抑圧性・差別性には無自覚なままといった事態は、フェミニズムに限らず各種反差別運動にまみ見られるところである。こうした傾向は体制内上昇志向につながり、「解放」とは自らも抑圧者になりあがることを意味しかねない。皇室、政府、軍隊、翼賛団体、企業などを思い浮かべてみればいい。

日本のフェミニズムもまた市川房枝以来、同種の傾向を、もつといえ「限界」を抱えこんできている。それが如実にあらわれてきたのは、一九九三年の皇太子結婚をめぐる騒動の渦中であつた。「キャリアアウマン」が社会的に認知されたという感じで、とてもうれしい」と書いた田嶋陽子など著名な「フェミニスト」とされる人々の「奉祝発言」を覚えてゐる方も多いただらう。もとより私は自分よりはるかに年上の「フェミニスト」と呼ばれる女性たちに対し、なんら信頼を寄せてはいなかつた（ちなみに私は一九六六年生まれである）が、そうしたあまりにもノーテンキな言辭に対しては苦々しい嫌悪をおぼえるのみであつた。もちろん、そういうフェミニストばかりでないことは後に知ることになるが（一九三年五月発行の「何がメデタイ、皇太子結婚!? 女たちはこの『結

婚』をどう見るか」集會報告集など参照のこと。

あるいは「学問」に回収され、あるいは分断された個別の問題へと拡散していった九〇年代日本のフェミニズムの「弱さ」「力不足」が目立つ。一九九五年、長引く不況と増大する社会不安を背に進行する保守化の波の中で、翼賛のメカニズムを剔抉することが痛切に求められているのではないか。一九三〇〜四〇年代の時代の圧力のもとに、女性解放運動家たちが高い志をもちながらも侵略戦争協力へと転向していった軌跡をみつめることこそ今われわれに必要なのではないか。彼女たちのナシヨナリズム、民族差別、天皇制信仰、政治的未熟さを、見据えるべきではないのか。なぜ、どのようにそうなっているのかという問題は、戦後ほとんど語られることもなくしてしまっただけではないか。翼賛と抵抗のわかれ道はいったどこにあったのだろうか。

七〇年代リブが「フェミニズム」と名を変え、変質を経て今にいたった。今年に女性参政権五〇年にもあたる（ちなみに女性参政権は一九四六年の新憲法制定より早く、敗戦直後の四五年一二月に成立している）が、今だれが婦選運動について語るだろう。婦選運動に限らず、五〇年前の、いや五〇年以上前の「婦人解放運動」、その歴史とわれわれの現在の意識がこんなにも切れてしまっていることはひとつの問題ではないのか。われわれはアメリカを尺度として自ら



の位置を判断するだけでいいのだろうか。日本人全体が生きてきたこうした歴史との断絶が急激に問題化してきているのは周知の事実である。なかんずくフェミニズムとも深い関わりのある旧日本軍「慰安婦」問題について最後にふれておきたい。九二年以来、日本政府は元「慰安婦」に対する補償の代替「措置」の検討を表明してきたが、今年七月一九日、ついに任意団体「女性のためのアジア平和国民基金」が発足。この民間基金に対しては、当然のことながら、内外の市民団体、さらには当の元「慰安婦」たち自身も反対の声をあげている（基金からの一時金を受け取ると言う元「慰安婦」も出ており、分断化が進んでいる）。九四年に

は国際法律家委員会が日本軍慰安婦問題に関する「最終報告書」を公表し、日本の法的責任と賠償義務を明確に指摘しており、この七月には国連人権委員会「女性に対する暴力」特別報告官を団長とする調査団が来日、「慰安婦」問題に関する調査をおこなった。「外庄」はますます強まりつつある。この「国民基金」があくまでも国家による個人補償をしないことを条件として生まれた民間基金であることを忘れてはならない。筋を違えた彌縫策は必ずや禍根をのこすことになる。私はこの民間基金の「呼びかけ人」に名を連ねた人々を思う時、「善意」があだとなって権力に利用されていったあの同じ構図を思いだす。まさしく国家の責任回避という名の国策にのせられた「善意」の行方を注視したい。

# 「女性のためのアジア平和国民基金」 に拠金を呼びかけます。

戦争が終わってから、50年の歳月が流れました。この戦争は、日本国民にも諸外国、とくにアジア諸国の人々にも、莫大な犠牲をもたらしました。なかでも、十代の少女までも含む多くの女性を犠牲的に「慰安婦」として軍に従わせたことは、女性の歴史的な尊厳を踏みにじる残酷な行為でした。こうした女性の方々が心身に負った深い傷は、いかに私たちがお詫びしても癒すことができないでしょう。しかし、私たちは、なんとか彼女たちの痛みを受け止め、その苦しみが少しでも緩和されるよう、最大限の力を尽くしたい、そう思います。これは、これらの方々に対えたい情を込めた日本が、どうしても今日ではたさなければならぬ義務だと信じています。

政府は遅ればせながら、1993年8月4日の内閣官房長官談話と94年8月31日の内閣総理大臣の談話で、これらの犠牲者の方々に深い反省とお詫びの気持ちを表わしました。そしてこの6月14日に、その具体的な行動を発表しました。(1)「慰安婦」制度の犠牲者への国民的償いのための基金設置への支援、(2)彼女たちの医療、福祉への政府の拠出、(3)政府による反省とお詫びの表明、(4)本問題を歴史の教訓とするための歴史資料整備、というのがその柱です。基金は、これらの方々への償いを示すため、国民のみならずから拠金を受けて彼女たちにこれをお届けすると共に、女性への暴力の根絶など今日的な問題への支援も行うものです。私たちは、政府による謝罪と共に、全国民規模の基金による「慰安婦」制度の犠牲者への償いがどうしても必要だ、という信念の下にこの基金の呼びかけ人となりました。

呼びかけ人の中には、政府による賠償がどうしても必要だ、いやそれは法的にも實際的にも多くの障害があり、早急な実現は困難だなど、意見のちがひもあります。しかし、私たちは次の一点ですべて一致しております。それは、すでに年老いた犠牲者の方々への償いに残された時間は、一刻も早く行動を起こさなければならない、という気持ちです。

私たちは、「慰安婦」制度の犠牲者の名誉と尊厳の回復のために、歴史の事実の解明に全力を尽くし、心のこもった謝罪をするよう、政府に強く求めてまいります。同時に、彼女たちの福祉と医療に十分な予算を積み、誠実に実施するよう、監視の目を光らせるつもりです。さらに、日本や世界にまだ残る女性の尊厳の侵害を防止する政策を積極的にとるよう、求めてまいります。

しかし、なによりも大切なのは、一人でも多くの日本国民が犠牲者の方々の苦痛を受け止め、心からの償いの気持ちを示すことではないでしょうか。戦時中から今日まで50年以上に及ぶ彼女たちの苦痛と苦悩は、とうてい償いきれるものではないでしょう。それでも、私たちが日本国民の一人一人がそれを理解しようと努め、それに基づいた具体的な償いの行動をとり、そうした心が彼女たちに届けば、癒し深い苦痛をやわらげるのに少しは役立ててくれる、私たちはそう信じております。

「従軍慰安婦」をつくりだしたのは過去の日本の国家です。しかし、日本という国は決して政府だけのものではなく、国民の一人一人が過去を引き継ぎ、現在を生き、未来を創っていくものでしょう。戦後50年という時期に全国的な償いは果たすことは、現在を生きる私たち自身の、犠牲者の方々への、国際社会への、そして将来の世代への責任であると信じてます。

この国民基金を通して、一人でも多くの日本の方々が償いの気持ちを示して下さるよう、切に参加と協力をお願い申し上げます。

### 呼びかけ人

- 赤松 良子 (元文部大臣)
- 芦田 基之助 (日本労働組合総連合会会長)
- 新藤 謙吉 (東京大学名誉教授)
- 大来 舜子 (大泉堂外典学)
- 大庭 淑子 (元学芸員)
- 大沼 保昭 (東京大学教授)
- 岡本 行夫 (国際コンカタル)
- 加藤 タキ (コーディネーター)
- 下村 潤子 (ジャーナリスト)
- 鈴木 健二 (日本放送協会会長)
- 須之部 豊三 (元外務省参事官、元駐韓国大使)
- 高橋 祥起 (新潟大学名誉教授、徳島文理大学教授)
- 鶴見 俊輔 (評論家)
- 野田 愛子 (弁護士)
- 萩原 経路 (歴史家)
- 三木 隆子 (元日本国際交流センター専任)
- 山本 正 (日本国際交流センター専任)
- 和田 春樹 (東京大学教授)

基金口座について  
郵便振替口座 0020-371164 「女性のためのアジア平和国民基金」  
なお、日本赤十字社本社、全国社会福祉協議会でもお預り  
するごときといたします。



ごあいさつ

「女性のためのアジア平和国民基金」の発足にあたり、ごあいさつ申し上げます。

今年は、内外の多くの人が大きな喜びと悲しみを経験した戦争が終わってからちょうど50年になります。その間、私たちは、アジア近隣諸国等との友好関係を一步一步進めるよう努めてまいりましたが、その一方で、戦争の傷痕はこれらの国々に今なお深く残っています。

いわゆる従軍慰安婦の問題もそのひとつです。この問題は、旧日本軍が関与して多くの女性の名誉と尊厳を深く傷つけたものであり、とうてい許されるものではありません。私は、従軍慰安婦として心身にわたり癒しがたい傷を負われたすべての女性に対して、深くお詫びを申し上げたいと思います。

このたび発足する「女性のためのアジア平和国民基金」は、政府と国民がともに協力しながら、これらの方々に対する国民的償いや医療、福祉の事業などに取り組もうというものです。呼びかけ人の方々の趣意にも明記されているとおり、政府としても、この基金が所期の目的を達成できるよう、責任を持って最善の努力を行ってまいります。

同時に、二度とこのような問題が起こることのないよう、政府は、過去の従軍慰安婦の歴史資料も蓄えて、歴史の教訓としてまいります。

また、世界の各地で、今なお、数多くの女性が、いわれなき暴力や非人道的な扱いに苦しめられていますが、「女性のためのアジア平和国民基金」は、女性をめぐるこのような今日的な問題の解決にも努めるものと理解しております。政府は、この面においても積極的な役割を果たしていきたいと考えております。

私は、わが国がこれらのごことを誠実に実施していくことが、わが国とアジア近隣諸国等との真の信頼関係を強化、発展させることに通じるものと確信しております。

「女性のためのアジア平和国民基金」がその目的を達成できるよう政府は最大限の協力をを行う所存ですので、なにとぞ国民のみならず一人一人のご理解とご協力を賜りますよう、ひたえにお願ひ申し上げます。

内閣総理大臣 **村山富市**

「従軍慰安婦」にされた方々への償いのために。  
さらに今日的な女性問題の解決のために。  
基金は政府と国民の協力で。

**女性のためのアジア平和国民基金**  
理事長 原 文兵衛

事務局 / 〒107 東京都港区赤坂2丁目17番42号 赤坂アネックス4階 電話03-3583-9346

# 「戦後五十年」ななめ読み

萩野はるか

今年も夏がやってきました。戦後五十年目の夏です。

書店や図書館では、専門の書棚や陳列台を並べて、「夏ぐらい戦争のことも考えてみましょう」といった風に言っているかのようです。ただ、今年はオウムや震災のせいもあり、意外とその規模も小さいような気がします。

今年の夏がどのようなものとして確認され、位置づけられようとしているのが、これがこのページのテーマです。そうした素材として、ここでは雑誌を取り上げてみたいと思っています。雑誌のコンパクトにまとめられた特集記事は、その特集の組み方自体にも編集者や出版社の姿勢や意図が明確に現れているからです。

○「SPA!」(九五年七月十二日号)  
「PANJA」(九五年八月号)

扶桑社

最近、小林よしのりも撤退してしまった週刊「SPA!」は、戦後決議のあと、早々と特集を組みました。タイトルは「ニッポンの『戦争責任』って何なんだ!」。そして、同誌の「兄貴分」的月刊誌「PANJA」では8月号「『戦争』への抑えがたい誘惑」。

この二つの雑誌のターゲットは三十才前後の男性サラリーマンです。前者は「戦後

決議」をめぐって交わされた議論を整理して、いったいオヤジたちは何を巡って議論しているのかを考えてみよう、というものの。しかし、最初から最後まで、傍観者。「戦争責任」は、どこまでも「ひとごと」。結局、このひとたち、争いのネタとしてしか見ないのではないが、と怒りが湧いてきます。「PANJA」はもっとひどい。戦争画、戦争映画、戦闘服などの魅力を語りながら、そうした「魅力」を一刀両断で否定する。「反戦・平和主義者」を断罪する、というのが基調です。それはハッキリ言って、自分のオモチャを取られそうになった人間が「コドモって言わないよ、だって、子どもに失礼だもんね」「ばーか、何にもしらないくせして俺たちの好きなものを取り上げるんじゃない!」と叫んでいるという図。「戦争おたく」の代弁者として使命感すら帯びた文章からは、中途半端に現実の社会にあきらめた作り手の意識が透けている。あんたたちに「絶望」する資格なんてないよ、と言ってやりたくありません。

○「SAPIO」

(八月二十三・九月六日合併号)

小学館

「RONZA」(八月号、九月号)

朝日新聞社

「SAPIO」の「大新聞の『戦後50年企画』をズバリ採点!」は、ねらいとして

は、この文章と同じです。朝日、読売など、日本の日刊紙六紙で組まれた「戦後五十年企画」を四人の論者に分析させるというのがこの特集。各紙の企画はいずれも「新聞の戦争責任」の検証と天皇制に対する言及を避けているという点で非常に不徹底である、という結論を出しており、その点では「全く、その通り」と言う他ありません。

この特集のズルいところは、「大新聞」というメディアに予先を限定することで、自分たちが「責任」を問われるというシチュエーションになることをあらかじめ避けているところにあります。

このために、『社会の木鐸』を自称し、『ニッポンの知性』を自認する大新聞の「知性」とはこんな程度のものなのか、という本誌の結論は、空転します。なぜなら、「大新聞」という（他のメディアとは区別される）特別な存在なのだという一般論を冷笑するのであれば、当然のことながら、自らの「出版社（人）」としての戦争責任を問わなければならないのですから。その肝心のところに頬かむりしたままの本特集は、「結局、人のことなら言えるのね」ということではなくなってしまうのです。

朝日新聞社の出している月刊誌「RONZA」は、2カ月連続で特集を組んでいます。8月号が「文筆者、出版、新聞の戦争責任」9月号が「日本が蓋をしてきたもの」。残念ながら、タイトルほどに、「新聞の戦争責任」の内部に踏み込むことはしていません。必要とされているのは、「出版社



▲講談社の絵本  
「感状に輝く勇士奮戦美談」

「日本児童文学」 95年8月号

「新聞社」でペンを執る者の決意表明文などではなく、民間のメディアが翼賛体制に組み入れられたばかりが積極的に「翼賛」していったという事実をタブー視することなく真摯に分析することなのですが、自らの責任を現在の地点から検証する、という姿勢で組まれた特集で、すぐれたものとして次の雑誌が挙げられます。

### ○「日本児童文学」九五年八月号

（文芸堂）

戦時中の児童文学作家には明らかに戦争責任がある、とする立場から組まれた特集は、

戦時下の児童文学とその著者にスポットライトをあてた上で、更に、戦後の児童文学において戦争責任がどのように問題にされてきたのかを考察するという二段構成になっています。

「門外漢」の私には、初めて知ることばかりでとても興味深く読めました。戦意昂揚のための作品を書いた当事者だけの問題とするのではなく、戦後、戦争責任論がいったん試みられたにもかかわらず不発に終わったことの意味と限界を探ろうとするこの特集は、この問題を自らの「戦後責任」の問題として引き受けているという点で、他のどの特集よりも光っています。今必要なのは、具体的な「戦争責任」を追求することだけでなく、戦争責任を問うてきた思想そのものの検証なのだ、とする主張に大きな共感もちました。

### ○「週刊ダイヤモンド」

九五年七月二二日号

（ダイヤモンド社）

経済を専門に扱う週刊誌で「戦争責任」の特集をやっているのは、私の見たところ、この雑誌だけです。題して「企業の戦争責任」。鹿島花岡鉱山での中国人の強制連行についてはよく知られていることですが、本特集は、この「鹿島花岡訴訟」を端緒として、戦後補償の問題にかなり深く切り込

んでおり、なかなか読みごたえがあります。強制連行が実は企業と軍、政府が一体となって遂行されたものである以上、企業がその「戦争責任」に頼かむりすることはできない、との編集サイドの積極的な姿勢が感じられます。

ゼネコンを中心とした関係企業へのアンケート結果と「社史」検証は、いろいろ考えさせるものがあるので機会があれば是非ご覧いただきたいところです。

そろそろ紙数が尽きてきました。あとは、ざっと。

「Voice」平成七年八月号（PHP）。江藤淳、石原慎太郎、会田雄次など「いかに」の顔ぶれで組まれた特集は、題して「五十年目の敗戦」。この旧守派或いはタカ派の「業界」で飯を食っているオジサン、オバサンたちの「サロン」で話されていることは昔からぜんぜん変わらないし、従って、毒すらもない。同類雑誌「新潮」45、「This is 読売」、「正論」も同じような顔ぶれ、同じ基調。

「実業の日本」九五年八月号（実業の日本社）の特集「『産業界』と『日本人』の戦後50年」。敗戦の焼け跡から、「奇的」に復興を遂げた日本の産業界。円高、株安等、先行きが不透明で不安定な今だからこそ、「戦後日本の軌跡」をトレースしよう、というのがこの特集。ここでは、戦後は「ゼロからの出発」であり、戦前は問題にすらなっていない。このため、「戦後決議」の評価についても、「Voice」

系雑誌に見られるような否定の論調とは明らかに異なっています。

「戦後五十年を一つの区切りとして、次の新しいステージに立つためにも、もっとすっきりした形での国会決議であって欲しかった」と思います。（編集後記）

「決議」なるものは、それだけでは決して意味などなく、実質的な補償という責任を果たしてこそ意味があることの筈ですが、そうした具体的な提言はいっさいありません。五十年を区切りに、「戦後」を断ち切る「みそぎ」のための決議。それ以上でもそれ以下でもないのです。

資料として使えるのが、「芸術新潮」九五年八月号（新潮社）。特集「カンヴァスが証する画家たちの『戦争』」。なかなかお目にかかれない「戦争画」をまとめて見ることができるといって、非常に有益です。またキネマ旬報の臨時増刊号は「戦争映画」の目録として便利です。

直接触れることができませんでしたが、論文として気になったものを二点ばかり。

「諸君」八月号の佐瀬昌盛「ドイツ」戦後処理「のかたち」と、「中央公論」八月号北岡伸一「歴史の検証と個人の責任」戦後五十年決議をめぐって。とりわけ北岡の文章を読むことは、戦後補償の必要を感じている人間、「いま」の地点で反戦・平和の思考を組み立て直したいと考える者にとっては自分の主張を試されることになるはず。ディベートとして読むには格好の論文です。

…おまけ

### ◆ 「戦後50年」関連美術展 ◆

○9月3日まで 東京国立近代美術館 「所蔵品による全館陳列」

この美術館は、アメリカから「永久貸与」の形で返却された「戦争画」を153点所蔵しており、そのうち、今回は藤田嗣治の「アッツ島玉砕」他2点を展示しています。同美術館は所蔵している「戦争画」を企画展示したことは一度もありません。それは「近隣諸国に対する配慮」（！）からだそうです。そうした同館の戦争画」に対する姿勢が展示の仕方などからうかがえます。

○9月24日まで 神奈川県立近代美術館 「ヒトラーと退廃美術」展

ご存じ、ナチスが1937年に開催した「退廃芸術展」の回顧展。…しかし、こういうことができるなら、自分の国の「戦争と芸術」論でも深めろよ！といたくなります、はっきり言って。

○9月24日まで 町田市立国際版画美術館 「戦争・人間展」

# 『パンサー』のサウンド・トラックを聞く

三浦大介(みうらおおすけ)

突然ですが、わたくし、某黒人音楽専門誌に、黒豹党(ブラック・パンサー・パーティ)についての記事を書いてしまいました(別の名前でですけど)。

なんだが、スパイク・リーの『マルコムX』の柳の下のセカンド・ドジョウみたいだな感じで、シックスティーズに勇名をはせたアメリカ黒人の「過激派」、黒豹党を題材にした『パンサー』という映画ができたのだそうです。作ったのは、メルヴィン・ヴァン・ピーブルズ・ジュニアという黒人の二世監督。二世というのは、親さんが人種差別にイジめられながら腕力で映画監督をしたエライ人で、『スウィート・スウェットバックス』というのが代表作らしいけど私は未見)、このジュニア氏はその一茂つか手塚真たいなお方だということ。この映画は、アチラで『マルコムX』みたいなヒットはしなかったようで、だから日本で公開は、東京オンリーでしょうね。北陸のメロウなローカル・シテイに棲息する私

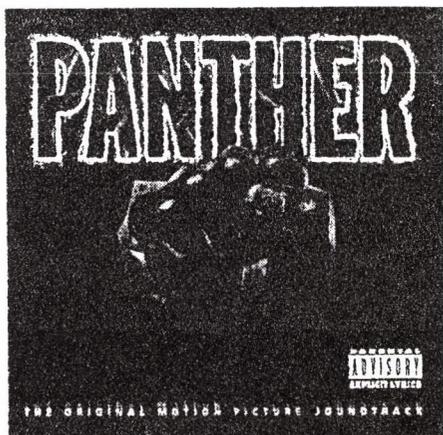
が見る機会は、ビデオ以外のかたちではあるかどうか。

にもかかわらず、雑誌からパンサー論の記事の依頼は受けるし(あ、一応私は、そういうことに多少詳しいことになってるんです、だって、オジサンなんだもん)、大学の生協へ行けば『パンサー』のサントラCDを特売(一六八〇円也)で売ってるから、ついつい買っちゃうし、それどころか、サヨクのマイ・マン、Oさんがインタナーネットで、パンサー関係の情報をとってくれるもんで、パンサーの闘士で長年の法廷闘争ののち無罪を勝ち取ったドルバ・ピン・ワハードてえ人が、この映画のことを「政治意識がある人間ならだれでも、腹を立てる作品だ」と評したなんてマイナーな知識まで、入ってきちゃう。ニホン社会の昨今の高度情報化って、なーんか変だよな。

さて、私の記事のポイントの一つは、パンサーの武装について、でした。あの武装って、白人警官の暴力に対する自衛のため

には仕方なかったって話もあるし、また日本赤軍やウェザーマン、西独赤軍なんかと軌を一にした都市ゲリラによる第三世界解放・世界同時革命という政治路線の産物だったって話もあるけど(あ、唐突かしら、私が学生だったころは、よくクラスヘアジリに来てたカッコいいオネーサンが、近ごろ顔見ないなと思ったら、大菩薩峠で武装蜂起の訓練をして逮捕されてた、なんて時代だったから、こういう用語がすっーと出てくるのよね)、それだけじゃない。彼らの誇示的な武装の背景にはたぶん、奴隷制以来の苛酷な支配が黒人男性にもたらしたトラウマ的な去勢感覚(昔は白人女性と寝たという噂だけでリンチの対象になり、「奇妙な果実」にされて木からブラ下げられたんだからね)を、武器(はい、ファリック・シンボル、つまりチンチン力象徴っす)によって癒やす、というモメントがあった。だから、結局かなりマッチョっつか男性優位主義的な運動になっちゃって、でもって今、アリス・ウォーカーのような黒人のフェミニストに批判されてるんだよね。しかし、こんな指摘、流行りのギャングスタ・ラップ(黒人街のマッチョでデンジャラスなワルガキのラップ)をカッコイイと思う今の若い衆は、分かってくれないだろうな。

で、最後に、サントラCDの話。これは、



## PANTHER

The Original Motion Picture Soundtrack  
1995 PolyGram Records

1. VARIOUS ARTISTS—"FREEDOM "
2. JOE—"EXPRESS YOURSELF "
3. BLACKSTREET—"WE'LL MEET AGAIN "
4. FUNKADELIC FEATURING  
GEORGE CLINTON AND BELITA WOODS  
—"BLACK PEOPLE "
5. MONICA AND USHER  
—"LET'S STREIGHTEN IT OUT "
6. VARIOUS ARTISTS—"THE POINTS "
7. BOBBY BROWN—"SLICK PARTNER "
8. ARRON HALL—"STAND (YOU GOT TO) "
9. DA LENCH MOB—"THE WORLD IS GETTO "
10. SHANICE FEATURING FEMALE  
—"IF I WERE YOUR WOMAN "
11. THE SOUNDS OF BLACKNESS FEATURING  
BLACK SHEEP—"WE SHALL NOT BE MOVED. "
12. FEMALE—"NATURAL WOMAN "
13. VARIOUS ARTISTS—"FREEDOM "
14. MODGE—"HEAD NOD "
15. TONY TONI TONE—"STAND "
16. THE LAST POETS—"DON'T GIVE ME  
NO BROCCOLI AND TELL ME IT'S GREENS  
(WHAT HAPPENED TO OUR RYTHM) "
17. BRIAN MCKNIGHT AND THE BOYS CHOIR  
OF HARLEM—"STAR SPANGLED BANNER "
18. THE ULTIMATE SACRIFICE

ポピー・ブラウンやブラックストリートをはじめ、ブラック・ミュージックの若手や大物がてんこ盛りで参加して、映画とは別に楽しめるはずのもの。パンサーが活動した六〇年代後半から七〇年代前半にかけてのソウル／ファンクの名曲のカヴァーがけっこうあって、それが若いリスナーには新鮮、年寄にはなつかしいってことになる。それでも、去年の夏のウッドストック二五周年記念イベントみたいにイヤらしくならないのは、黒人音楽の伝統を大切にしよう、みたいな筋が一応、企画の芯に通っているからだろうね。でも、なんか豪華な陣容すぎてピンぼけ、みたいな感じもあります。

私のお目当ては、ジョージ・クリントン（Pファンクというクレイジーな音楽集団の総帥として七〇年代後半にディスコテイックを席巻したオジサン）だったんだけど、この人の曲には精気がなく、悲しかった。逆に、クイーン・ラティファやMCライト、サルトーン・ペツパ、ヨー・ヨーといった女性ラッパーたちが肩を並べるラップ曲が、元氣いっぱいよかった。曲（つうかライム）のテーマは「シスターたちの自由」で、のっけから「パパがニュー・バグ（新しいダンス）で注目を集めるときに、ママは台所で新しい水差しを洗ってた」という、ジェイムス・ブラウンのダンス曲にひっか

けた口撃がある。ぜんぶ聞き取る力などないけど、「伝統だろうと宗教だろうと、私の決断に口を差しはさせはしない」なんて一節が耳に飛び込んできて、これはたぶん妊娠中絶の話なんだろうね。黒豹党を扱った映画のサントラ盤に、こうしてシスターの立場からのラップが入るのが、現在なんです。ただ、そんなアルバム結びに、何の皮肉も批評もない真正直な「星条旗よ永遠なれ」の演奏が収録されているのよね。えっと驚いて椅子から転げおちかけると同時に、合州国の大衆文化状況の出口のなさを感ぜずにはられませんでした。

# 会社は 楽しい ですか

ねこいるか



職場という場所はどうしてこうなんだろーと、つくづく思う。

私は「うちの会社ってすごくない職場で、いい人たちばかりで、働いてるのが楽しくてたまらない」という人にお目にかかったことがない。みんな自分の職場には不正義がまかりとおっている、と思っているし、「あなたの職場の素敵な人を教えて」と言われたら、「えーっ、うちの会社にそんなやついねーよ」と答えたくなるだろう。

そのぐらい「職場」というものは嫌な場所だと思われる。その一方、多くの人はなんとなく職場を楽しいとも思っている。私も職

場って嫌な奴がいたり不正義があったりして嫌な場所だと思ふけれど、でもどっか楽しいところもある。これはいったいナンナノダ？（きつと戦争中の軍隊も似たようなもんだっただんでしよう）

会社に入るまでは、職場というのはお局様がいたり、すごく人格と頭の悪い部長がいたり、血も涙もない社長がいたりする場所、とてもいやなところなのだろうと覚悟を決めていた。でも、入ってみると、ぜんぜんそうじゃなかった。みんなそれぞれいろんなことを悲しいと思ったり、面白いと思ったりする普通の人たちだし、同僚もみんなそれなりにじつは面白い人たちだ。

でも、職場に「この人だけは味方だ」と思える人はいない。「この人は信頼できる」という人がいない。職場のみんなに対してどこかしら「こういうところは信用できないな」と、感じている。それがすごく悲しい。

私は、職場のなかでも人を信頼したい。私は年齢にかかわらず、給与に関わらず、女であることに関わらず、今回の仕事の出来や、前回の仕事の純利益の多さ、先月の残業時間などに関係なく、まず「ねこいるかさん」（それぞれ自分の名前をあてはめてみてください）として尊重されたい。

とくに年齢による抑圧というのは本当に大

きくて、会議でも四〇や五〇のおじさんおばさんは若い人なんてまるでそこにいないかのようにふるまう。同じことを言っても、年齢の高い人が言うのと納得されるなんて、ナンセンスだ。一方で若い人同士はなんとなく競争関係にある。

多分、この相互不信感が、こんなに人間的な人々のあいだに非人間的なことがまかり通るものになってるんだらうと思う。

たとえば、私はある出版社に勤めているけど、会社の業績がズンズンのびているにも関わらずボーナスの月数は下がり続けている。でも組合がないので、みな不満はあるけれど「だれか組合つくりなよ」と、お互い言うだけでいっこうにその気配はない。

どうしてかという、ずっと以前組合があったときに、代々木系の人が組合の要求をگری押しし、交渉の長引く中で一人、二人と逃げていき、しまいにだれもいなくなってしまうからだ。当時を回想するときみんな「あいつが逃げたからいけない」と互いに陰口をたたきあっている。で、もう二度とだれも組合なんてやりたくないと思っているのだ。

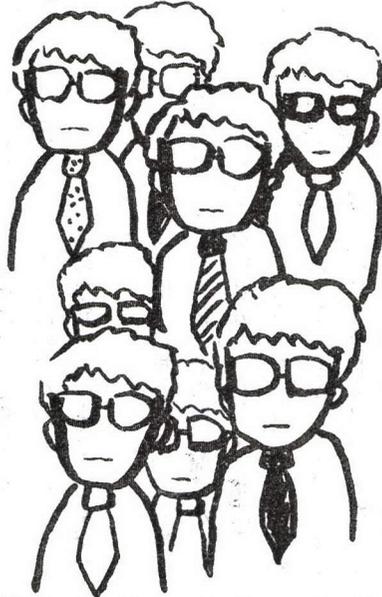
うちの会社には問題はいっぱいある。たとえばいまだに五五歳定年で、定年を延長される人とされない人がいるけれど、なぜ延長したのかとか、しなかったのかという基準は示

されていない。五〇代の人、自分が延長されたいからなにも言わなくなっている。それ以下の人たちは、自分に関係ないことで会社に声をあげるなんてソンだからなにも言わない。

ほかの会社だって、組合だってたくさん問題はかかえているだろう。相互不信感も同じようなものだろう。そして、みんなあきらめきっている。だれも「このままでいい。今のやり方が正しくて最高だ！」なんてひとつも思っていないのだ。

なんなんだこれは！ 私ははっきりいって怒ってる。なんなのよこれって！ どこかで読んだ覚えのある情景がいつも頭に浮かぶ。広い広い雪原を収容所に向かう囚人たちの長い長い列。見張りの兵は何メートル置きかだけ。見ているほうは思う。もしかして、全員がいつせいに逃げちゃえば逃げられるんじゃないの？ でも、彼らは収容所につけば自分が殺されることをみな知っているのに、誰も逃げだそうとしない。もうあきらめているから。とても静かな、静かな行進。

私はこんなのいやだ！ 仕方がないとあきらめるなんていやだ。みんなこれでいいと思ってるの？ 本当に満足してるの？ 会社のなかに信頼できる人間がいなくなってる当然なの？ 「それが職場だよ」って思う？



私はいやだ。私は人間的に尊重されたい。年齢や給与や業績や、そうした数字なんかで私の尊厳を切り刻まれたくない。私はなによりもまず一人の人間として尊重されたい。

ねえ、みんな教えて欲しい。ほんとはどんなふうに働きたいのか。ほんとはどんなふうな職場の人と助け合いたいのか。ほんとはどんな問題を抱えているのか。ほんとはいまだんな気持ちなのか。職場の人と助け合いたいのなんて馬鹿な考えだと思う？ 一番最初にそう思ったのはどんな時だったの？

こういうことを私はほんとに話したい。こんなに互いがバラバラになってるのが本当につらい。

こんなこと書くのは、じつはこわい。だってみんな「職場ってそういうものなのよ」って願ってるんだもん。でも、ほんとはこんな

のいやだってあなただって思っているんでしよう？ 教えて欲しい。

ある人が私にこんなことを言ってくれた。

私 「職場に味方の人なんていないの」

その人 「じゃあ、あなたがだれかの味方になるって決めてごらん」

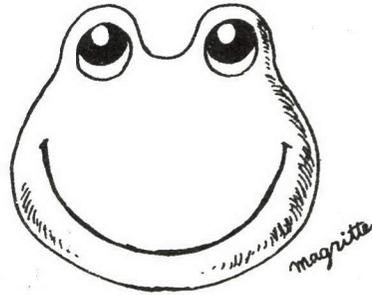
それを聞いて私は「ギャーッ」っていう感じだった。誰かの味方になるなんてことしたら、会社のほかの人全員敵にまわすような気がしてスゲクこわかった。

でも、もしなにかはじめるとしたら、そこからしか始まらないんだよね。それで私は味方になるために、「この人の悪口だけはずつたいに言わない」という人を会社のなかで一人選ぼうと吟味している最中です。

居心地悪いのが当然の場所なんて、ほんとは全然必要ないよね。このことを誰かにうなずいてほしいんだ、すごく。これ読んでる人、お願いだからあきらめないでほしい。

私はいま、ホワイトカラーの職種の人で集まって自分の感じてることとか話す場所をつくりたいと思ってる（自分がホワイトカラーの仕事なので）。できれば編集者のそういう集まりもつくりたい。興味のある人はCR AZ Y J A N Eあてに連絡ください。なにかこの文章読んで感じたら、連絡ください。待ってるね。

ちのみち通信・特別寄稿



*Ceci n'est pas Quéroillon.*

これはケロヨンではない  
ミッシェール・風子

前号のねこいるかさんの「死ぬな！ 飲んでえ」の中で誤りだと思われる箇所が二つほどあったので、寄稿させていただきました。しかし、この文は居丈高なお節介からではなく、ささやかなものへの愛とノスタルジーから書かれたものなのです。

一 ケロヨン

薬局の店頭でよく見かけるコルゲンのカエル人形。もうずいぶん長いことおなじみのキャラクターであります。その名前については誤った知識が流布しているようです。十人中八、九人がこのカエルの名前を「ケロヨン」だと思っているらしい。たかがカエルの名前と思っただけではありません。コノハツクとブツポーソーのように、誤った命名がそのまま定着してしまった悲

劇もあるのです。このふんだと近い将来、真のケロヨンが忘れ去られてしまうことも危惧されます。



図1

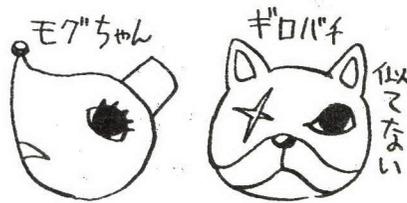


図2

で、図1に挙げるのがケロヨンであります。ケロヨンとは、縫いぐるみの人形劇で、昭和三十年代末期か四十年代初めごろテレビと舞台で人気を博していました。デザイナーは影絵で有名な藤城清治、演じていたのは「木馬座」という劇団で、「クルクルカッポンカッポン、クルクルカッポンカッポン、大人になっても忘れない、木馬はおもちゃの王様だ」というテーマソングは、三十代以上ではけっこう覚えてる人も多いのではないのでしょうか。

ケロヨンの主な特徴は、①「バハハイ」とか「ケーロヨン」とかが口癖の陽気な奴である、②カエルのくせにカーキチである、等であり、その他サブキャラクターとしてもぐらのモグちゃんとか悪役のギロバチ（「ギロギロバッチオン」と言って登場）なんていうのがいて（図2）、ストーリーはケロヨン

らがいる動物の村で様々な出来事が起こる、という他愛のないものだったように思います。

そしてケロヨンのテーマソングには、「楽しい時はケロヨン、さみしい時もケロヨン」「パパにもママにも言えないことも、ケロちゃんだけには言えるのさ」というくだりがありました。そうです、地震が来ても、サリンを撒かれても、ケロヨンが勇気づけてくれるし、「カムアウトしようかどうか迷っている」「エロ本を万引きした」「犬とヤツた後、生理が来ない」「尿道から膿が出る」「クラスの奴等に、もう百万円以上も脅し取られている」「毎日放課後、音楽の先生に一人だけで音楽室へ呼び出され、発声練習だと言って胸とかおなかの下の辺りを触られるが、どうも変だと思う」「金星人がしょっちゅう電波で話しかけてくる」なんて悩みごと、ケロヨンに話せば一挙に解消です。まさに彼こそ、今の私たちが最も必要としている存在なのです。

ということで、今後コルゲンのカエルを「ケロヨン」と呼ぶではありません。さもないと、苦しいこと、悲しいことがあっても、誰も話を聞いてくれませんよ。それならコルゲンのカエルは何なんだ、ということになります。最近では「ケロ」「コロ」という名前がついているようです。

### 一 サトちゃん

私の記憶では、サトウ製菓の象(サトちゃん)はたしかオレンジ色だったので、「ピンクの象」というくだりは謎に満ちたものでした。目元のデザインだけでなく、色まで変えたのか？それとも、他の製菓会社が新しいマスコットを作り、それをねこいるかさんが誤認したのか？ 悶々と悩む日々を送っている、玉蟲さんから「ウチの近所の薬局の前にピンクの象があり、たしかにサトウ製菓のものだ」という情報が入ったので、急遽我々川口浩探険隊は都内の某所に向かった。すると、扉に

たくさん病名や漢方薬名を大きく書き連ねた、「だるま薬局」という名前からして怪しげな薬局の店頭には、ピンクの象が立っているではないか。恐る恐る近づいて台座を見ると、我々の目に衝撃の事実が飛び込んできた。

「サトコちゃん」……そう……彼女はおそらく、サトちゃんのガールフレンドか妹なのだろう。□元に笑みを浮かべ、頭には花を飾り、サリィのような服にネットワークスという時節柄アブないで立ちでたずむサトコ(図3)。……今ここに一つの冒険が終わった。我々は彼女との別れをなごり惜しみつつ、さわやかな気分で帰路につくのだった。ありがたう、サトコ。そしてだるま薬局。あなたがたのくれた夢とロマンを決して忘れることはないだろう。



図3

以上、貧弱な記憶だけを頼りに好き勝手を書きましたが、「いや、そこは違う」とか、「私はコルゲンのカエルやサトちゃんや木馬座についてこんな事も知っている、特にプーフーウーやペーパックの事を書かないなんてサンタ・サンタレだ」などと思っただ方は御教示いただければ幸いです。

教えて！会社のへんな人

ちのみち通信のコーナー

# 伝説の営業マン



ぬこいるか

会社というところはへんな人にいっぱい出合える場所である。

会社に入ると、部署によるかもしれないけれど、いろんな営業マンとおつきあひすることになる人も多いと思う。この営業マンにへんな人が多い。

私は営業マンというのは体育会系かおばさん系で、ハキハキしていて、ずうずうしいような人がやるものだろうと思っていたが、どうもそうではないらしい。

某印刷所の営業マンA君は、ハキハキ話しているように見えて、なんとなくつりあがった目のあたりに、追いつめられたネズミのような風情の漂う人だった。

印刷所の営業マンというのは、原稿や原稿を活字に組んだものを、印刷所

と編集者がやりとりするとき、それをもってきてくれたり、もってつたりするのが仕事である。私のつとめている会社は出版社なので、いろんな人が仕事を頼んでいて、基本的に毎日来てくれないと仕事にならない。

しかし、このA君はなぜかたまに、編集者のいない昼休みや帰宅後をねらってやってくる。

最初のうちは、昼休みの直前や、こちらの帰宅直前にやってきてたのが、だんだんとこちらがまったくいらないときに来るようになり、しまいいには、電話しても三日後ぐらいにしか来なくなってしまう。それも急ぎの仕事の時にである。

やっと来た彼に向かって、その仕事を担当していた人が猛烈に怒り、「な

にやっつてんだよ！ そんなことじゃ仕事にならねえよ！」と怒鳴ったら（怒鳴って当然である）、彼はいつも凍り付いてるような顔をいつそう凍り付かせ、パタリと姿をあらわさなくなってしまう。

しかたがないので、その人はまた電話をして、彼に仕上がった仕事をもつてくるように言ったのだが、また、待てどくらせど彼が来ない。三日後、また電話を入れると、彼の上司はこう言った。「いやあ、御社に行ったら誰もいなかったらしくて」。

上司までバカであった。

結局、その仕事は「バイク便」で届けられ（バイク便で仕事をやりとりしたら、営業マンの存在理由はない。なんのために会社は彼を雇い続けたのであろう）、以後、ほかの仕事もそのやり方で届けられるようになり、仕事の受け取りは上司がやってくるようになり、それから半年以上もたつて、彼は「実家の家業を急に継がなくてはならなくなる」と退職した。みながほっとしたのは言うまでもない。

彼は伝説に残る営業マンとなったのである。

# Hysteria

「彼女、アレなんじゃないの」そんな一撃で信用を失ってきた者にとっては。

20世紀初頭には、フロイトがヒステリーについてこう書いている。「まさに、思春期前にボーイッシュな性格を見せる少女こそが、思春期においてヒステリーになりやすいことは、しばしば認められるところである」。

現代の医学書によれば、ヒステリーの症状が起こるのは、「患者が無意識のうちになにかを獲得したいと願っているためであり、したがって、われわれはこうした症状を、ある目的をそなえた、助けを求める叫びとみなすべきである」。さあ、ともあれ核心に近づいてきた。そう、助けを求める叫び。

トロイアの女予言者カッサンドラの言うことをだれも信じなかった。彼女はヒステリーのシンボルだ。助けを求める私たちの叫びは、人類の存続とこの惑星の未来を求める嘆願の声だ。もし女たちの声がこのまま無視されつづけるなら、万人が困難に陥ることだろう。フェミニズムはすべての生きとし生けるものの代弁者である。だが、この問題についてはまた稿を改めて論じたい。

ヒステリーは「激烈な感情」を伴うといわれている。本誌のタイトルを、かつて私たちをおさえつける仕掛けであった「ヒステリー」から採ったのは、この言葉を削り変え、自己決定と自己賛美の色合いで染めあげるためなのである。こうした価値の転覆行為の企ては、世界の中で私たちが占める場所を定義し直すための一歩である。私たちは悪罵をくつがえし、自らを名づけ自らの名を示そう。自分のために言挙げすることのできる女ほど、世に力強いものはないのであるから。

(訳/市川恵里)

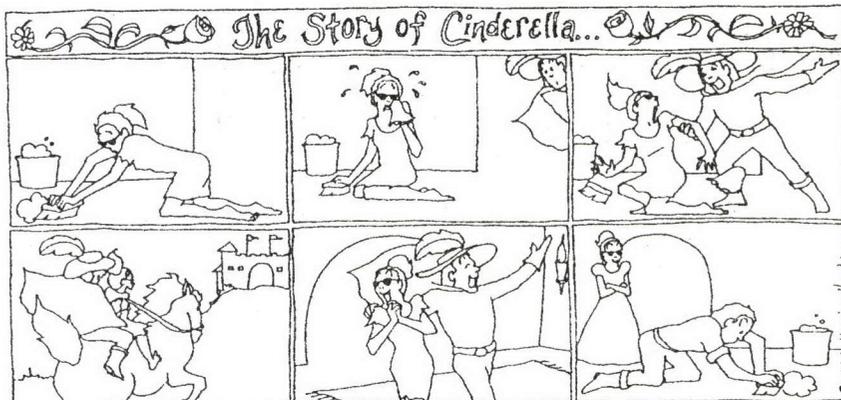
血が騒ぐだとか、女の原始性とか、ともかく太古の昔から、いわれっぱなしなんだよね。人に世間にいわれることに、おののいて、どんなに女が自己規制してきたことか。この無駄な苦労の積み重ね。ちきしょう〜。ヒステリーでどこがわるい。あ〜でも、私にしても、日に何百回も「居直り、居直り」の呪文を唱えないことには、生きていけないのですよね。

次回も『ヒステリア』の雑誌から、記事を紹介する予定。

この雑誌に関するお問い合わせ、又、海外洋書についてのお問い合わせ、ご注文、承ります。

マルベリィ・ブックス TEL/FAX 0423-85-9550 〒184 小金井市本町4-17-7 まで。

Maxine



がまのつかい、あるいは、ぶたねこの本棚

## 『Hysteria』

(出版社：Hysteria アメリカ)

マルベリィ・ブックス れんり

『Hysteria』(ヒステリア)というアメリカの雑誌、なかなか小粋で生意気でしたたか楽しい。フェミニズムのユーモアで、暗い世情を笑いとばせ、元気をつけろ、わたしら負けないよといったエネルギー補給本で、読み物あり、漫画ありの雑誌である。今、私が手にしているのは、94~95の冬号で、今後どこまで、刊行を続けてくれるかどうか、いささか心配な弱小出版社の手になるものだが、アメリカの女性たちの底力を信じて、私も日本で応援団したいと思っている。なぜ、この雑誌にヒステリアなるタイトルをつけたのか、を説明する Wendy Kesser による巻頭言の抄訳を紹介する。

デファン夫人いわく、「女はその弱さを武器にすると、もっとも強くなる」。この精神にのっとって、私たちは Hysteria (ヒステリー) という語を誌名に選んだ。何百年にもわたって、社会に受け入れられない行動をとった女に対して「ヒステリー」というレッテルが貼られてきた。

『Hysteria』は、自覚的なフェミニストであるとないとを問わず、自分自身と、自分の生きる世界に対してユーモアのセンスを失うことのないすべての女性のための雑誌である。

今日、「ヒステリー」という言葉は、興奮した精神状態ないし、取り乱し、絶望した気分を指すのに使われるが、その語源は子宮を意味するギリシア語の *hysteria* にある。ヒステリーは、紀元前1900年初頭に書かれたエジプトの医学文献の中にはじめて登場する。当時は、体内臓器の平衡失調、具体的には子宮が不安定で体の中をさまよっているために起こると考えられていた。症状は子宮の落ち着き先しだいであった。

同様に、この病気の定義そのものもまた概して、その時代時代の社会の態度によって変化してきたのであった。女たちが一歩前へ進むたびにのしかかるもの。私たちが何か新しい自由にどれほど近づこうと、新たに加わったヒステリーの定義がついてまわっては足を引っばってきたように思える。

中世において、「ヒステリー」は教会と神秘主義の下に組みこまれた。この病気はもはやさまよう子宮の問題ではなくなり、もって生まれた悪、悪魔憑き、魔術に関わるものとなった。

オックスフォード英語辞典によれば、なんであれ「ヒステリック」あるいは「ヒステリカル」であるものとは、子宮に特有の事柄である。この言葉はまさしく女のものなのだ。男の中身は精神で決まるが、女の中身は子宮で決まる。ヒステリーと診断をくだされることは、今日の女性にとっても間違いなく重大だ。♫

From Editor Jane

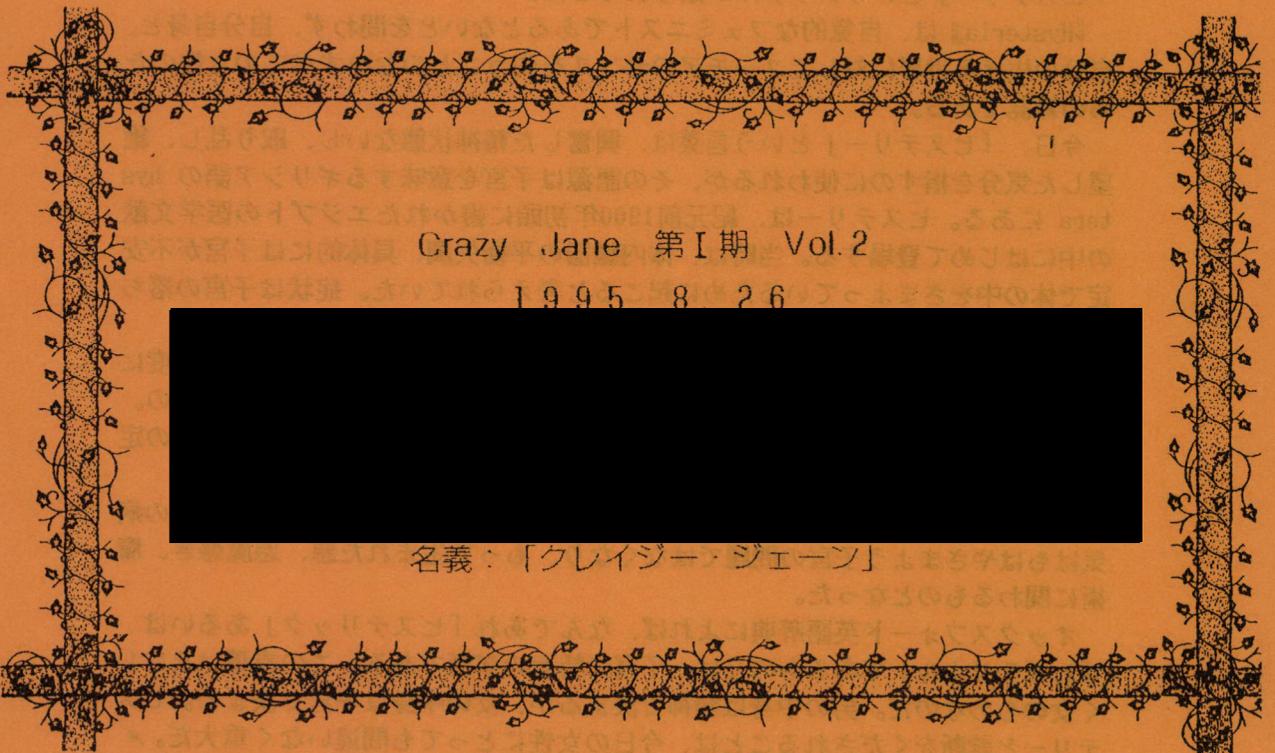
とにかく「暑い！」夏でした。みなさんは、どのようにこの夏を過ごされましたか？

二号目になりました。一挙に大增ページです。テーマは四方八方に飛んで、いよいよ「なんでもあり」になってきた感じです。

最近、おもしろい本、映画、劇、コンサートなどありませんでしたか？  
気になる出来事、これは是非言いたい！と思うこと、ジャンルは問いません。  
下記までお知らせください。また、今号の文章に対する反論・異論なども是非お寄せください。投稿引き続き大歓迎です。

それでは、次号でまたお会いしましょう。

(次号は10月21日発行予定、投稿原稿の締切は9月29日です。)



Crazy Jane 第I期 Vol.2

1995 8 26

名義：「クレイジー・ジェーン」